

ZENnoTomo 禅の友

4
2023





ご本山だより 大本山永平寺【拝み合ういのち】

大本山永平寺
福井県吉田郡

☎〇七七六・六三・三一〇二

四月八日はお釈迦さまのお誕生日。偉大なる聖者を讃嘆する桜花爛漫の好時節です。

永平寺では年中行持ぎょうぢとして例年の如く花御堂はなみどうの屋根を生花で葺き、甘茶を沸かして誕生仏を盤の中に納め、法堂ほつどうにて灌仏法会かんぶつほうえ出班焼香しゅっぱんしょうこうを修行し祝とちします。

お釈迦さまの誕生仏は、右手で天を左手で地を指して、『天上天下唯我独尊どくそん』（天にも地にも唯我れ独り尊し）と叫ばれたお姿です。

その際の「大地が光を放ちゆらぎ、百花が一時に開き、天空は五色に光り輝き、龍王は甘露の法雨を灌頂して聖者の降誕を祝祷した」という伝説から甘茶を誕生仏に灌ぎます。

甘茶を頂くと疳の虫がとれて泣き

虫毛虫が退治出来る。甘茶で字を書けば上手になる。柱におまじないを書いて貼れば毒虫が寄りつかぬ等、祖父母と幼い孫との対話も今は昔です。

令和の時代になって、花まつり・甘茶といっても現代の人には何のことやら伝わらないかもしれませんね。

しかし今の時代だからこそ、『天上天下唯我独尊』お互いにお互いが尊い仏の御いのちであることを自覚し、いのちの有り様を今一度見つめ直す必要があります。

互いに拝み拜まれる礼拝らいはいの修行が日常底にちじょうぞの僧宝そうぼうを貴ぶ生活は誠に有難いものです。難値難遇のご縁に感謝し、坐禅で自己を拝み、合掌礼拝して共に拝み合いましょ。

泣き

泣き



ご本山だより

大本山總持寺

【花まつりと報恩大授戒会】

ほうおんだいじゆかいえ

大本山總持寺

神奈川県横浜市

☎〇四五・五八一・六〇二一



誕生仏（右・香積台、左・大祖堂）

春爛漫の好時節となりました。四月五日は清明せいめいと呼ばれる季節です。これは「清浄明潔じよんじやうめいけつ」という言葉略したもので、「すべてのものが清らかで生き生きしている」という意味です。二十四節気の五番目で、春を六つに分けたうちの五番目の節気です。

この時期、中国や沖縄では大切な行事とされ「清明節」「清明祭」と呼ばれ、お墓を掃除して先祖供養をする、お盆のような行事なのです。空は澄み、草花が活気づく清々しいこの時期は春の息吹を感じながらの散策もよいのではないのでしょうか。そして八日は降誕会かうたんえ、すなわちお釈迦さまの誕生日で仏教徒にとっては涅槃会ねはんえ、成道会じやうどうえとあわせて大切な行持です。

禪師さまの御親修で法要が勤まり、天と地を指さすお釈迦さまの誕生仏へ甘茶を注ぎ、供養を致します。

また、十日から十六日は報恩大授戒会かいていです。全国から参集した戒弟かいていと呼ばれる参加者と多くの山内外の僧侶が一体となつて自らの罪を懺悔ざんげし、戒の何たるかを聴聞し、そして戒師さまより戒を授けていただくのです。

戒を授かることは仏道に真実に生きようとすする確かな証です。「戒は是れ正順解脱しやうじゆんげつたつの本ほん（もと）なり」とあるように一つ一つの正しい行いによつて一つ一つの心が開き、仏心に目覚め一人の仏弟子が誕生するのです。未だ感染症の収束が見られないならば何らかの対策を講じての修行になるでしょう。

選・坊城俊樹

ちらつきし雪ながめつつ抹茶チヨコ

山口県 稲村 みどり

評 なんというこのない普通の句のように感じるがこの余韻がいい。雪の降り始めをなんとなく窓から見ている作者。その舌には抹茶のチヨコレートの味が広がる。それは白くてフワフワとした雪の味と調和をしているかのよう。心静かな時間がここにある。

吾の顔に微笑返し初鏡

島根県 依保 恵

評 初鏡とは正月初めて鏡に向かつて化粧をすること。自分が笑えば鏡の中の自分も微笑みを返してくる。あたりまえだが、新年だからこそこの一年の心構えのようなこと。ことに女性にとってはこの笑みの大切さは新たな年への指標となるのだろう。

◆ 日めくりの真すぐ切れて大旦 三重県 荻屋 奈良美

◆ 人住まぬ家かと覗く千大根 長崎県 崎田 定雄

◆ 梅東風や疎水の流れ透き通り 埼玉県 橋本 永子

◆ 水涸れて龍は淵より動かざる 島根県 金山 陽

◆ 蠟梅の花蠟梅の花に影 愛媛県 井上 征郎

◆ だんまりは我の持ち味懐手 鳥取県 眞山 博充

◆ 雪降つてさ庭にもある獣道 秋田県 鈴木 糸い子

◆ 凧揚がる空の青さの深くまで 石川県 千間 宏治

◆ シベリウス流れるタベ山眠る 埼玉県 熊谷 頼子

◆ 佐助の白の儂さ土に落つ 兵庫県 待元 明子

選者吟

君の名は永久に美しきや嫁が君 俊樹

作句小見 「嫁が君」とは正月三が日の鼠のこと。しかしこの時期は鼠をもてなす習慣もある。なんとも綺麗な言葉を付けたものである。普段は忌み嫌われる鼠も、こと正月には美しい名で呼んでやろうというまことに日本人らしい繊細で温かい言葉。

選・長澤 ちづ

初日の出見んとトラック集まりて村の空
き地は一夜の街に

埼玉県 新井 巳喜雄

評 日の出が見られる絶好の場所がどの地域にもある。この一首では、村なれば農作業をするトラックに乗って、家族みんなで初日の出を拝みに来るのだろう。常は静かな田園地帯が大晦日の夜ばかりは街のようだとその賑わいを詠う。

戸を開けて雪のにおいを嗅いでみる北国
に住む小さな楽しみ

秋田県 小松 紀子

評 その日によって雪の匂いはかすかに異なるのだろうか。繊細なその感覚がやさしい調べとともに伝わる。雪下ろしの大変さのみではない雪国の幸に少しホッとします。

◆ 真ん中に希望を置きて生くべしと父は言ひにき坂行く吾に
岐阜県 後藤 進

◆ 四つん這ひに雑巾がけした廃校の廊下を歩けばようこそと軋む
三重県 西村 廣視

◆ 堤防にばたばた暴れいし魚が静かになりて海は夕風
山口県 濱田 道子

◆ 母方の寺に墓参をする時の母は少女の如くはずめり
石川県 千間 宏治

◆ 煙吐く汽車があこがれの子どもの日函館線の消ゆるふるさと
北海道 菅原 三江水

◆ 帰り来ぬ夜勤のせがれ待ちわびて戸口に立てばみぞれ降る音
鳥取県 徳本 義則

◆ コロナ禍で面会出来ぬ夫思ふ目を閉ぢ心のその声を聞く
岡山県 生田 孝子

◆ 極月の月のさやかに雲もなく天の海路を月渡りゆく
ロンドン バロ― 典子

◆ 気遣いて少し声高に会話するグラウンドゴルフで共々元気
静岡県 高尾 善五

◆ 窓明り一つ灯ればまた一つぼつりぼつりと灯る山裾
福岡県 三吉 誠

選者誌

寒晴れの澄みたる青に昼三日月転げ落ちそう木立の
中へ

ちづ

作歌小見

抽象的でありながらリアルな「真ん中」、後藤さんの歌の父上の教えの「真ん中」の力強さに感動しました。なかなか帰らぬ夜勤の息子を案じて寒い戸口で待つ徳本さんの父親像にもまた愛の深さを思います。